博士学位論文審査等報告書

審査委員　主査　大谷貴美子

副査　木戸康博

副査　東あかね

1　氏　　名

饗庭　照美

2　学位の種類

博士（　学術　）

3　学位授与の要件

京都府立大学学位規程第３条第４項該当

4　学位論文題目

高齢者のQOL向上のための食環境に関する研究

5　学位論文の要旨及び審査結果の要旨

【学位論文の要旨】

別紙に記載

【論文目録】

別紙に記載

【審査結果の要旨】

超高齢社会が進行する中、老人福祉施設で暮らす高齢者が増加している。高齢者の健康寿命の延伸には、栄養状態が深く関わっているが、施設給食では、往々にして「栄養バランスのとれた食事の提供」に主眼が置かれ、「おいしく食べて満足感を得る」という喫食者側の精神的な満足感が軽視されがちである。その結果、食欲の減退を招き、低栄養状態に陥る入居者も少なくない。本研究は、施設で暮らす高齢者に焦点を当て、『サクセスフルエイジング』を達成するために配慮すべき食環境を明らかにすることを目的として実施されたものである。

第１章では、研究の背景について文献検索を行い、本研究の社会的な位置づけを明らかにしている。第２章では、高齢期になると、白内障などにより、食物の視認

能力が低下すること、施設で暮らす高齢者の場合は、調理担当者が本人以外の人であること、加えて咀嚼・嚥下困難者に提供される刻み食やペースト食などでは、もとの食物の判別が困難な場合が多いことなどから、60歳以上の男女を対象に色彩識別能力や調理方法の違いによる食物認識の違い等を調査し、おいしく、安全に喫食してもらうためのいくつかの提案を行っている。また喫食者本人が何らかの形で食事の準備に参加することが、食事満足度を高める上で有効であることも明らかにしている。ところで国は、特別養護老人ホームを対象にユニットケアの推進を目的に整備補助金制度を設けているが、ユニット内にキッチンを設けることは義務付けていない。加えて、養護老人ホームは補助金の対象とはなっていない。しかし養護老人ホーム入居者は、特別養護老人ホーム入居者より自立度は高い。そこで、第3章では、養護老人ホームで暮らす高齢者に、調理に参加できる機会を提供することの意義を明らかにする目的で、全国に先駆けて、ユニット内調理（ユニット内のキッチンで日々の食事が作られる）を導入した養護老人ホームにおいて、入居者と職員（介護員、調理員、栄養士、管理栄養士）を対象に個別インタビュー方式による調査をおこなっている。まず、ケース記録から評価した入居者全員の栄養状態は、ユニット内調理導入6か月後には改善していたことが示されている。その要因として、調理や皿洗いに参加している入居者が増え、食事満足度が高くなっていることが示されている。また、職員へのアンケート調査からも、食事サービスが良くなったこと、介護職員・調理員と入居者との会話が増え、入居者の食嗜好がよく把握できるようになったこと、加えて、管理栄養士は、入居者の喫食状況が介護職員と調理員双方からに伝わることで栄養アセスメントがしやすくなったことなどが示されている。しかし、一方では、仕事量の増加に伴う職員の疲労感が増えたことが示され、ユニット内調理を実施する際の、支援体制の重要性も示唆している。ところで、国の調査によると特別養護老人ホームで、ユニットケア型施設に移行したのは、全体の28.9%（平成21年調査）となっている。しかし、ユニット内調理を導入した施設についての実態は調査されていない。そのため、第4章では、近畿地区の特別養護老人ホーム（531施設）の栄養士（管理栄養士）を対象に、入居者の食環境および入居者のQOLを高める要因について、調査を行っている（回収率は35.5%、194施設：ユニットケア型33.5%、従来型65.5%）。その結果、ユニットケア型で、キッチンを設け利用していたのは、63.6%であった（具体的な使用内容は不明）。そして食事は、ユニットケア型施設のほうが、より家庭的な雰囲気の中でなされていたが、入居者のQOLを高める要素では、施設形態に関係なく、「食事のおいしさ」と「入居者と職員の信頼関係」であることが示されている。以上の結果を踏まえ、第5章の総括では、ユニットケア型老人福祉施設において、ユニット内調理を導入することの意義として、「入居者、介護職員、調理員相互の密なコミュニケーションにより信頼関係が深まること、それが個別ケアの質を高めること、また食事の準備に参加できることで入居者の食欲が高まり栄養状態が改善されること、その結果、入居者のQOL向上に繋がり、職員の仕事のやりがいや意識改革にもつながっていく」という、良い循環を生む契機となることを示している。

本研究は、養護老人ホームにおけるユニット内調理の有効性を検証したはじめての論文であり、本研究の成果は、老人福祉施設に暮らす高齢者が、『サクセスフルエイジング』を達成するための食環境の改善を推進していく一助となるものである。

従って社会的な意義も大きい。以上より、本論文は、本学博士号授与に値するものと考えた。

6　最終試験の結果の要旨

平成26年2月24日午後4時より図書館視聴覚室において博士学位論文発表会を公開で行った。口頭発表後、最終試験としての質疑応答が行われた。質問では、ユニット内調理導入後に養護老人ホーム入居者の主観的QOLが上昇しなかった理由、本研究を通じて施設介護における栄養士、管理栄養士が果たすべき役割をどのように位置づけるかなどの質問があった。これらに対して、饗庭氏は、本研究の限界でもあり難しさでもある、養護老人ホーム入居者の入居以前の生活環境が、本人の主観的QOLの評価に影響を与えたこと、現在、養護老人ホームに義務付けられていない栄養アセスメントの重要性と、今後の栄養士、管理栄養士の果たすべき役割などを的確に回答した。最終試験の結果、審査員全員一致で合格とした。

7　学力の確認の結果

別紙に記載するように、学力確認を行った結果、合格とした。

以上